

(資料)

プラトン『カルミデース』内容梗概

水* 崎 博 明

第一章 (153a1-153d1)

ソクラテス、戦地から帰り人々の求めに応じて戦況の話しをつぶさにする。

第二章 (153d2-154b7)

ソクラテス、抜きん出た若者とは尋ね、美少年ならばカルミデースだと告げられる。

第三章 (154b8-155b8)

カルミデースの登場、その美、その素質の美を見るための対話へ

第四章 (155b9-156c9)

カルミデースの遣って来た時のソクラテスの上気とパッション、薬効の説明に自信を取り戻して

第五章 (156d1-157c6)

伝説の医師ザルモクシス流の「魂からの医術」の教へ

第六章 (157c7-158e6)

カルミデースの思慮の健全における傑出とその家系と血統からする当然、その自覚の如何と共同の吟味

第七章 (158e6-160d4)

「思慮の健全⇨物静か」説の検討

- 第八章 (160d5-161b2) 「思慮の健全⇨恥を知る心」説の検討
- 第九章 (161b3-162b11) 「思慮の健全⇨自己自身のことを行ふ」説の検討
- 第十章 (162c1-163e8) クリティアースとの対話へ、自己自身のことを行ふこと
- 第十一章 (163d1-164e6) 「善きことごともの行為」の含む問題
- 第十二章 (164e7-165b4) クリティアースの同意撤回と新たな主張——「思慮の健全⇨自己自身の知」
- 第十三章 (165b5-166b6) 「思慮の健全」といふ知識の作品、知識の対象
- 第十四章 (166b7-166e4) クリティアース、「思慮の健全」にその独自性を見る。
- 第十五章 (166e5-168b1) 「思慮の健全」とは自己自身を知りその知と無知とを知るとしてもその知は対象を欠けるのか。
- 第十六章 (168b2-169c2) 関係的なものとして自己自身の知を考へた場合のアポリアー
- 第十七章 (169c3-170c11) 知識の自己再帰と知・無知の知と
- 第十八章 (170d1-171c10) 「知識」としての内容を欠きただ「知の知」としてだけである「思慮の健全」
- 第十九章 (171d1-172c3) 「思慮の健全」に精々のところ期待されること
- 第二十章 (172c4-173a6) 正しき指導の善とは自明なことにはあらず。
- 第二十一章 (173a7-173d5) 夢のやうな話し——「知識」の支配と端的な「幸福」との隔たり
- 第二十二章 (173d6-175a8) 善悪の知識
- 第二十三章 (175a9-176a5) 探求者としての無能を思ふもなほ「思慮の健全」の善たることへの自信を言ふ。

第一章 ソクラテス、戦地から帰り人々の求めに応じて戦況の話しをつぶさにする。

1. 久しぶりに戦地から帰って来たソクラテス、馴染みの場所に行き多くの人に出会ったが、カイレポーンに無事の帰還の次第と激戦の様様を尋ねられる。

2. カイレポーン、次いでその戦闘の一部始終を聞くべく、ソクラテスをクリティアスの傍に導き座らせる。

3. ソクラテス、その場の質問に応じて戦況の話しをつぶさにする。

第二章 ソクラテス、抜き出した若者はと尋ね、美少年ならばカルミデースだと告げられる。

1. ソクラテス、話し的一段落の後、アテナイの様子、智慧の愛好についての現況と若者たちについて智慧や美或いはその両方においてその中に抜き出した者がゐるかどうかを尋ねる。

2. クリティアース、そこへ入って来る一群を美しいと評判の少年の求愛者だと告げ、その本人も間近だと教へる。

3. ソクラテス、その少年の誰かを問ひそれをカルミデースと告げられ、その子供の時に会った好印象を言ひ、今の成長振りを予想する。

4. カルミデース本人の登場

第三章 カルミデースの登場、その美、その素質の美を見るための対話へ

1. ソクラテスの美少年たちに向かっては白い墨糸同然なのだと打ち明け
2. カルミデースの眼を見張るばかりの身の丈と美しさ、他の人々の狼狽とざわめき、いとけない子供までのわき目も振らずに見つめる眼差し
3. カイレポーン、カルミデースの顔立ちの美しさに同意を求めるとともに、その裸体の美しさを強調する。満座の同意
4. ソクラテス、それを受けて一っだけ付け加はればカルミデースは無敵であらう、そしてそれは魂のよき素質だと言ふ。
5. クリティアース、ソクラテスがクリティアースの家系からして魂の素質の善さを思ふのに対して、いや、さうしたことでも実に美にして善であることを請合ふ。
6. ソクラテス、魂の美しさを見るべく、そこを裸にし対話して見ることを提案する。
7. クリティアース、カルミデースの哲学的な才能の所有と詩人たることを言ふ。
8. ソクラテス、詩の才能のソロンの血統に繋がるものであることを言ふとともに、クリティアースの面前ならば対話するのも許されようと言ひ、カルミデースを呼ぶことを求める。
9. クリティアース、ソクラテスの前に呼ぶのにソクラテスを頭痛薬を知る医者だといふことにして呼ぶやうに、従者に言ひつける。

10. ソクラテスのその承知

第四章 カルミデースの遣つて来た時のソクラテスの上気とパッション、薬効の説明に自信を取り戻して

1. カルミデースが遣つて来た時の誰もが彼をその傍に座らせてたくて押し合ひへし合ひして起こつた滑稽な情景のこと
2. カルミデースがソクラテスの傍に座つた時のソクラテスの上気と気楽に対話出来ると思つてゐた自信の喪失
3. カルミデースの肌を垣間見たソクラテスのパッション、美少年といふ獅子に我が身を奪はれるなど歌つた詩人キュディアスの詩句の思ひ出し

4. 頭痛薬を知つてゐるかとかルミデースに尋ねられ、知つてゐるとだけやつと答へたソクラテスの様

5. 「それは何」との質問に唱へごとと一組で効能の或る薬だと答へ、唱へごとを書き写したいとかルミデースが言ふのにソクラテス、自分を対話を通じて納得させてからだと答へる。

6. 次いでソクラテス、カルミデースが自分の名前を心得てゐてくれるその安心の上で唱へごと効能の説明へと取り掛かつて言ふ——善き医者眼病の治療は頭のそれ頭の治療は身体全身のそれだとするのではないか、と。
7. カルミデース、さういふ医者たちに気がついてをりその言葉を尤もだと賛成することを言ふ。

1. ソクラテス、カルミデースの言葉に勇氣と自信とを取り戻す。

2. そして言ふ――

イ、唱へごととはポテイダイアーに従軍中、一人のトラキア人から聞いたこと

ロ、ザルモクシス流の医術師であったこと

ハ、「医術は身体全体から」といふギリシア人の考へ方はさもあれ、なほ身体も魂抜きでは治療さるべくもないとザルモクシスは言ふのだ、と。ここがギリシアの医者の見落としてゐるところだ、と。

ニ、それ故、治療には魂の世話が必要だが、それは或る唱へごと、すなはち美しい言論でもってなされ、そしてその言論から魂のうちには思慮の健全が生まれ全身が健康になるのだ、と。

ホ、唱へごとでの治療に魂を委ねることこそ治療の始めであり、思慮の健全と健康とを別々にして専門医になることは間違ひである。

ヘ、如何なる患者にもせよ、これが治療の方式たるべし。

3. ソクラテス、以上の教への遵守の誓ひを立てたからには、カルミデースはその頭痛の治療のためには先づ魂を委ねなければならぬとする。

第六章 カルミデースの思慮の健全における傑出とその家系と血統からする当然、その自覚の如何と共同の吟味

1. クリティアース、口を挟む——頭痛から思考の働きまで改善されるカルミデースの幸福を言ひ、またその思慮の健全におけるその傑出を言ふ。

2. ソクラテス、傑出はその家系と血筋からしての当然だとしながらも、カルミデース本人のその点の自覚を問ふ。

3. カルミデース、顔を赤らめつつも、ソクラテスの問ひを肯定的に答へるのも否定的に答へるのも困難なのだと言へる。

イ、思慮の健全を失つてゐるとは自分の口から言ふべきことではないし、また人々の肯定的評価を嘘とすることにもなる。

ロ、肯定することはまた鼻持ちならぬことにもなる。

4. ソクラテス、カルミデースの答へを尤もだとし、その實際を調べようとカルミデースに持ちかける。

イ、カルミデースが自分で言ひたくないことを言はずに済ませるため

ロ、ソクラテスもまた不用意な治療を施すことにならぬため

第七章 「思慮の健全」物静か」説の検討

1. 思慮の健全の備はりにはカルミデースに何らかの思惑を持たせようことから

2. その思慮からするカルミデースの「思慮の健全」についての主張——何をするのも秩序に適ひ静粛にすべてを「行為すること、

物静かさ

3. 「物静か」の説に対するソクラテスの吟味(一)——

イ、「思慮の健全」は美しく見事なことに属する。

ロ、「見事」とは？

a. 文字を書く場合は速くか遅くか、速く書く場合である。

b. 読む場合は？ 速く読む場合である。

c. キタラ演奏や相撲の取り口の場合は？ 速く鋭くさうする場合である。

d. 拳闘やパンクラティオン、競争・飛躍・その他の体操競技の場合も同様である。

ハ、当面の結論——身体については「物静か」ではなく「速く・鋭い」が見事、すなはち思慮の健全である。

4. 同右(二)——

イ、物分りのよさと悪さ、物分りの速さとその遅さとは前者のほうが見事である。

ロ、教示も速くて力強い方が見事である。

ハ、想起と記憶も同様

ニ、機転の効くのも精神の鋭さ

ホ、理解も素早いのが見事

ヘ、探求や審議も同様

5. 更に当面の結論——34から、精神と身体との何れにもせよ、速くて鋭いものの方が見事であり、思慮の健全といふものが見事なものであらうとする限りは「物静かさ」ではあり得ない。

6. 5への理由づけ——

イ、物静かな行為が活発な行為よりも見事であるといふ場合は全然ないか稀にしかないかのどちらかである。

ロ、二つが同様に見事だとしても前者の方が後者に立ち勝って思慮の健全だとはならない。

第八章 「思慮の健全⇨恥を知る心」説の検討

1. ソクラテス、新ためて考へてみるやうに「思慮の健全」の具備はカルミデースをどんな人間にしてくれるか、またその性質のものとなすべく思慮の健全とはどういふものたるべきかを、問ふ。

2. 「思慮の健全」とは恥を知る心である。

3. ソクラテスの吟味——

イ、同意の要求

a. 思慮の健全は見事なものであること

b. 思慮の健全をもった人は優れた善き人であること

c. 優れた善き人にせぬものは善きものではないこと

プラトン『カルミデース』内容梗概（水崎）

d. 思慮の健全は見事であるのみならず、善きものでもあること

ロ、ホメーロスの詩句「慎みは、だが困窮せる者にとってあるべくもよからず」を引いての検討——これに拠れば、恥を知るは善きことにして善からぬこと

4. 「思慮の健全」を端的に善きものだとする限りただ「恥を知る心」だとは言へない。

第九章 「思慮の健全」自己自身のことを行ふ」説の検討

1. カルミデース、「思慮の健全」自己自身のことどもを行ふこと」といふ説を思ひ出して提出する。

2. ソクラテス、クリティアースの説かなどと疑ひながらも説の真実こそが問題なのだとして、その説は謎めいてをり、文字の表現通りにはそれは意味するものではなかったと言ふ。すなはち、問ふ——

3. 「自己自身のことを行ふ」をただそれだけをするの意味に解釈して問ふ——

イ、読み書きの教師は読み或いは書く場合、何事かは行つてゐるのであり、そしてその場合その読み書きは自分自身の名前だけに限りまた限ることを教へるものではなく自らと友達の名前のみならず敵どもの名前も書いたはずだ。さてさうだと、それは余計なことをしたこととなり思慮を健全に保つこととはならなかつただらうか。決してそんなことにはならなかつたが、実際また読み書きが「何かを行ふ」ことであるとしても諸々の名前の中で「とにかく自分たちのそれらを」といふことで行ひはしなかつたのではないか。

ロ、医療・建築・機織・その他、一般に技術的な仕事は「何かを行ふこと」である。

ハ、思考実験——上着を織る・洗ふ、履物・油瓶・浴用垢すり等々、他人のことには構はず各自自分のことだけをなし行ふ国家はよく治まるか。

ニ、ハに对照して——思慮の健全のある仕方ではじめてこそ国家はよく治まる。

4. 当面の結論——そのやうなこともとさうした仕方では自己自身のことどもとを行ふことは思慮の健全にあらず。それ故、やはり「自己自身のことを行ふ」とは謎である。

第十章 クリティアースとの対話へ、自己自身のことを行ふこと

1. クリティアースの焦燥、自負、カルミデースの退散への腹立ちと彼への問ひ——「自己自身の事を行ふ」との説をカルミデースが理解出来ないから説を唱へる本人も理解してはゐないと思ふのか、と。

2. ソクラテスの取り成し——カルミデースは若くクリティアースはよき年齢でもあり説に打ち込んでゐるのであるから、「思慮の健全＝自己自身のことを行ふ」の説の真意を受け入れてゐるのならその検討こそ課題だ、と。

3. 次いでソクラテス、一つのクリティカルな論点へクリティアースを導く——
イ、職人たちはすべて何かを制作する。

ロ、制作のあり方——自分自身のものだけを制作するのか、他人のものも制作するのか。後者である。

ハ、後者でも思慮は健全であるか。健全である。それで差し支へはない。

ニ、「思慮の健全」自己自身のことを行ふこと」と前提を立ててゐながら「他の人々のことどもを行ふ人々もまた思慮が健全だ」とするのはどうなのか？

4. クリティアース自らの立場の限定——自分の「他人のことどもを行ふ」の「行ふ」とはただ「制作する」といふそれだけの意味である。

5. その立論の背景としてのヘーシオドスの言葉遣ひ——

イ、「制作する」と「行ふ」とは違ふ。

ロ、「仕事を成し遂げる」と「制作する」も相違する。

ハ、「作品（仕事）」は何一つ非難の的ではない。

ニ、ソクラテスが語つてゐたさうしたことどもをヘーシオドスが「仕事を成し遂げること」だとも「行ふこと」だとも呼んでゐたとすれば靴作り・干物売り・やり手婆など誰一人にも非難はないと主張すべきか。

ホ、さう思つてはならずそれらの仕事は非難も買ふのであって、ヘーシオドスは「制作」を「行為」と「成就」とは別ものだと見てゐたのだ。そして「制作されて行くもの」は美を伴ふことなく生ずる場合は非難の的とも時にはなるが「作品」は如何なる時にも何一つ非難の対象とはならないのである。

ヘ、すなはち、見事にかつ有益に制作されたものどもをこそ「作品」と彼は呼ぶのであつたし、さうした制作を仕事にして行為であると呼んだのである。

ト、然るに、とまれ主張すべきは彼がさうしたものどもとはただ「固有のもの」だと考へ、有害なものはすべて「他所のもの」と考へたといふことである。

チ、結論——かうした意味でこそ「自己自身」のことどもを行ふ者は思慮の健全な者だとしたのである。

第十一章 「善きことどもの行為」の含む問題

1. ソクラテス、クリティアースの言ひ分が「固有にして自己自身のものどもが善きものである。善きものどもの制作が行為である」といふにあることを端的に察したこと、けれども諸々の名前の各々をどの道筋で欲するか、これはクリティアースに立てるべく与へるが、何を語るにもせよ何の上にもその名前をもたらしめてゐるか、その点だけは明らかにしてくれと言ふ。

2. 次にソクラテス、クリティアースの議論を明確化するために問ふ——「善きことども」の行為或いは制作、これが思慮の健全であるのか、と。クリティアース、肯定する。

3. また問ふ——悪しきことどもを人が行ふならば彼は思慮は健全ではなく、善きことどもを行ふならば彼は思慮が健全なのであるか。
4. クリティアース、ソクラテスにさうは思はれないのかと問ひ、問題はクリティアースの議論だとなつばねられ、まさにそれこそが自分の定義するところだと答へる。

5. ソクラテス、クリティアースが真実を語つてゐても差し支へはないが、しかしともかく次の点はこれを不思議に思ふのだとす。すなはち——思慮を健全に保つてありながらも人々が思慮を健全に保つてゐるといふことに無知であるとクリティアースが

考へるのかどうか。

6. クリティアース、さうは考へないと答へる。

7. ソクラテス、クリティアースの回答にも拘らず自らの示唆したあり方の可能性を示す(一)——

イ、職人らは他人のものを制作しながらにも思慮を健全に保つと言つてもよい。

ロ、或る医者は或る人を健康にしつつ自己自身のためにもその癒す人のためにも有益なものどもを制作してゐると思はれる。

ハ、とまれそれらのことどもを人が行ふのであれば、彼は「なすべきことども」をこそ行つてゐる。

ニ、人が「なすべきことども」を行つてをれば、彼は思慮を健全に保つてゐる。

8. 同右(二)——

イ、認識することが医者にとって必然であるか、すなはち「何時有益に癒したか、何時さうは癒さなかつたか」の認識、また職

人たちの各々にとって彼がそれを行ふその仕事から何時裨益されようとしてゐるか、何時は否であるか、と。回答——否

ロ、医者は利益になる仕方で行した上で、或ひは有害な仕方で行した上で、自己自身を如何に行為したか、これを認識しな

いのである。とは言へ、利益になつて行為したその上では思慮の健全を保つ仕方こそ彼は行為したのだった。

ハ、結論——時に利益に適つて行為した上で、一方思慮の健全を保つ仕方で行為しかつ思慮は健全ではあるが、他方彼は、彼が

思慮を健全に保つてゐることに無知なのである。

第十二章 クリティアースの同意撤回と新たな主張——「思慮の健全」自己自身の知

1. クリティアース、「自らが自らに無知なあり方で思慮を健全に保ってゐる」と同意するくらゐなら、以上に与へてゐた同意を撤回することを言ふ。そして主張の核心は「思慮の健全」自己自身を認識すること」だとする。

2. 続いてクリティアース、デルポイの銘文についてのその解釈を披瀝する。先づは——

イ、「汝自身を知れ」とはアポローンからの挨拶なのだが、「御機嫌よう」といふ挨拶は正しくはないのであつて我々は「思慮が健全であれ」とこそ勧告し合ふのでなくてはならないのである。だが予言の神のアポローンはその「思慮が健全たれ」といふのを謎めかして「汝自身を知れ」といふ風に言ったのである。

ロ、もう一つの解釈の線——「度を越すなかれ」「抵当に沿ひ破滅が」といふ「汝自身を知れ」を挨拶としてではなく訓戒として解釈するもの、

3. 再び自らの主張の要点を主張する——前の説を放棄しその不明確を言ひ、「思慮の健全とは自己自身を知ること」だとしてその説明の用意があることを言ふ。

第十三章 「思慮の健全」といふ知識の作品、知識の対象

1. ソクラテス、クリティアースの「説明してやるといふ物の言ひ方にこだはりそれではまるで自分が出してゐる問ひの答はこれ

を承知してゐるみたいではないか、さにあらず、私はただ探求だけをする者なのだと云ふ。

2. 調査の開始——

イ、「思慮の健全」が認識であれば、それは「何か」の知識である。回答——自己自身の知識である。

ロ、また「医術」も「健康」についての知識であるが、その有用と何を成就するかとは「健康」なる美しい作品のそれである。

ハ、同様に「建築術」は建築することについての知識であり、その仕上げる作品は「家」である。

ニ、設問——ロハに倣ひイの場合を回答すればどうなるのか。「思慮の健全」はどんな美しい作品を成就するのか。

3. クリティアース、ソクラテスの探求の仕方の間違ひを言ひ、その理由を挙げる——

イ、指摘——「思慮の健全」といふものは、他の諸々の知識とは似てはゐないし他の諸々の知識も相互に似てはゐない、それなのに似てゐるのだとしてその探求をしてゐるのだ。

ロ、理由——計算や幾何の技術には建築術や機械術のやうにはその作品はない。

4. ソクラテス、クリティアースの指摘を尤もだとしつつも、しかしそれらの知識の各々が「何の」知識なのかはこれを示すことが出来、その「何」とは知識そのものとは別のものだと答へる。その例示——計算の技術は偶数と奇数についての知識であり、それらの間での数量的な関係の知識だが、それら偶数、奇数といふ知識の対象は計算の技術そのものとは違つてゐるのである。量る技術に関して同様

5. 設問——「思慮の健全」とは「何か」の知識であり、その「何か」は「思慮の健全」そのものとは別である。

第十四章 クリティアース、「思慮の健全」にその独自性を見る。

1. クリティアース、ソクラテスの設問は「知識とそれとは異なるその対象といふ仕方一般化されて「思慮の健全」とその他の知識とを類似のものとして行はれてゐるが、しかしそのやうな類似はないとする。すなはち、「思慮の健全」だけは他の色々の知識についての知識であるのみならず、それ自らについての知識なのだ、と。

2. クリティアース、右の主張とともに「ソクラテスはすでにさう承知しながらにもクリティアースの反駁を事としてゐるのだ」と不満を言ふ。

3. ソクラテス、右のクリティアースの不满に答へて「問題は議論そのものの吟味」ではないのか、そしてそれが互ひの裨益される本ではないかとする。

4. ソクラテス、右についての同意を得て問ふ——「思慮の健全」についてのクリティアースの言ひ分は何か、と。

第十五章 「思慮の健全」とは自己自身を知りその知と無知とを知るとしてもその知は対象を欠くことが出来るのか。

1. クリティアース、あらためて主張する——「思慮の健全」はそれだけが他の知識とは違ってそれ自身についての知識でありかつ他の色々の知識についての知識である。

2. ソクラテス、発言を受けてそれを敷衍し、ならばそれは無知についての知識でもあり、かくては「思慮の健全」なる人だけが

自己自身を知り、その知と無知とを調べる事が許される。更に彼だけが他人の知と無知とそれに伴ふ思ひと思ひ込みとを考察することが出来るのだとする。

3. ソクラテス、クリティアースの同意を得てここが勝負とあらためて考察することを提案し、第一は知つてゐる事柄については知つてゐると知ること、知らない事柄については知らないと知ること、このことが可能か。第二にはさうした知識には如何なる利益があるか、これらが問題だとする。

4. ソクラテス、しかしここでアポリアーを提出する――

イ、クリティアースが持ち出した知識はその知識自らとその他の知識についての知識であるのみならず、無知についての知識であるといふその或る知識だとなるが、それは「視覚」がその対象たる色彩を見ただそれ自身や他の色々な視覚の視覚でありかつ無視覚の視覚だといふのとアナロジカルなのか。

ロ、同様に、その対象たる音声は聞かずそれ自身や他の聴覚を聞き無聴覚を聞く場合、感覚も諸感覚や自己自身についての感覚ではあるが何一つも感覚せぬ場合、快樂を欲望するのではなく欲望する場合、善きことは意志せずそれ自身や他の意志を意志する場合、美を恋するのではなくそれ自身や他の恋を恋する場合、また恐ろしいものを恐怖するのではなくそれ自身や他の恐怖を恐怖する場合、思惑もその対象をではなくて様々な思惑やそれ自身を思惑する場合、かうした場合があり得るだろうか。

5. 以上とアナロジカルに考へた場合、「思慮の健全」が自己自身の知識であるといふ主張は困難になりはしないか。

第十六章 関係的なものとして自己自身の知を考へた場合のアポリアー

1. ソクラテス、「思慮の健全」なるその知識は「何かの」であり「何かの」であるといふ機能を持つことを確かめさせる。同様に「より大きいもの」も「何か」よりも、すなはち「より小さい何か」よりも大きくある。

2. 或る「より大きなもの」、すなはち、一方では諸々のより大きなものと自己自身よりも大きいけれども、他方、それらよりも他のものどもがより大きいものども何一つよりもより大きくはないもの、これを我々が発見したとすれば、すべての仕方で次のことがそのものに帰属してあることになるだらう。すなはち——それが自己自身よりもいやくもより大きいのであれば自己自身よりもより小さくであることが。

3. 同様に——

イ、二倍のものが他の二倍のものどもや自己自身の二倍であるならば、それ自身や他の二倍のものどもは半分となり、そしてそれらの二倍だといふことになる。

ロ、それ自身より多ければまたより少なく、より重ければより軽く、より年長ならばより年少となり、要するに自分の機能を自己自身に向けてこそ持つものはその機能が関係する彼のをかてて加へて持つことになる。

ハ、ロを例示すれば、聴覚は音声こそその聴覚であれば聴覚が自己自身を聞くのなら、聞かれる聴覚自らが音声を持つ。視覚も自らが自らを視覚するのなら、視覚される視覚そのものが色彩を持つ。

4. 自己再帰を考へることは或いは全面的に禁じられるか（大きさや多さの場合）、或いは大いに疑はしいか（聴覚・視覚などの場

合)であらう。

5. 基本的な検討課題とは——次の区別こそ肝要である。
 - イ、機能とは再帰的ではなくて必ず自己自身以外のものに属するものなのか。
 - ロ、自己再帰させるものが存在する場合もあり、存在しない場合もあるのか。
 - ハ、存在する場合がある時に「思慮の健全」といふ自己自身の知識がさうであるのか。
6. ソクラテス、5の区別について見通しを持たず知識の再帰についても確信がなく、またそれが「思慮の健全」であるかどうかを承認もしない旨を表明する。そして大前提は「思慮の健全」が何か善きものたることであらうから「思慮の健全」の知識の再帰が有益であるかどうかの検査が先決だとする。
7. そしてソクラテス、最後に当面の説の主張者はクリティアースなのだから右の課題に応ずるやう求める。

第十七章 知識の自己再帰と知・無知の知と

1. クリティアースへのソクラテスの困惑の伝染とそのひた隠し、それ故に対話の進行を図らうとのソクラテスの発言——「知識の知識」の存在を仮定するとしてそのことは「何を知り何を知らぬか」といふ知識の内容をどれだけ一層我々に知らしめるものなのか。何故なら、知と無知との確認こそ自己自身の知にして「思慮の健全」であるとされてゐたから。
2. クリティアース、右の問いに対して「知識それ自身がそれ自身を認識する知識を人が持つなら、彼はその持つ知識があるやう

なさうしたやうな者になる」のだと答へる。速さ・美・知を持って速く・美しく・知者となると。

3. ソクラテス、対して知識自身を知る知識の所有は自己自身を知る知識だとは承知しても知・無知の知識はそこからして必然的に出て来るのかと問ふ。

4. クリティアースの回答——「何を知り何を知らぬか」とは「知識の再帰」と同一である。

5. ソクラテス、これに対してなほも問ふ——「何を知ってゐるかを知ること」と「何を知らないかを知ること」は如何にして同一なのか、と。

6. 次いでソクラテス、5の問いの意味をクリティアースが問ふのに対して、「知識の知識」であれば知と無知との区別はつけられようが、それ以上のことは不可能だと確認させる。

7. 右の含意——「知識の知識」は「健康」や「正しいもの」の知識・無知識とは同一ではなく、ここには知識として医術と政治の技術とがあるが、「知識の知識」の「知識」とは何の限定もないただの知識に過ぎない。

8. 对象的な「健康」や「正しいもの」を知らずにただそのことだけの知識をもってゐながらであれば知識だけを認識するに過ぎないのならば、一方彼は何かを知ってゐるのだといふこと、そして或る知識を持ってゐるのだといふことは当然認識出来よう、自らについても他の人々についても。

9. だが、他方、何を彼が認識してゐるかはその知識でもってしては知られ得ない。何故なら、対象にも及ぶべき知識はそれとは別に各個存在するのだから。

10. 然るに、「思慮の健全」でもってしては、もしそれが単に諸々の知識の知識であれば、对象的な「健康的なもの」「建築的なもの

の」を知ることはいないだらう。すなはち、その知識を人が欠いてあれば彼は何を知ってゐるかを知らず、知ってゐるとだけ知るのである。

第十八章 「知識」としての内容を欠きただ「知の知」としてだけである「思慮の健全」

1. 前章の考察の再確認——「思慮が健全であること」も「思慮の健全」も次のこと、つまり知ってゐることどものことを知ることではなく、否、知ってゐるといふことと知ってはゐないのだといふこと、それだけを知ることである。

2. 右の含意——他人の知識の主張に關してもその真実如何を吟味することは出来ない。認識するのは他人が或る知識を持つてゐるのだといふことだけであつて、「何の」知識なのかはこれを他人に対して「思慮の健全」は認識させはしないのである。すなはち「自称医者」と「本物の医者」を区別することは出来ない。

3. 右の事情の分析——

イ、「医者」の偽者と本物との区別のためには「思慮の健全な人」は「医術」といふ知識については彼と問答しはしないだらう、医者は何らそれを解するところはなく、ただ彼の解するのは「健康的なもの」と「病的なもの」なのであるから。すなはち——
ロ、医者はとにかく「知識」については何も知らず、それを知識することはただ「思慮の健全」のみに与へた。すなはち、「医術」については「医者」は知らないのである、「医術」が知識なのであれば。

ハ、翻つて「思慮の健全な者」は、一方、何か或る知識を持つてゐるといふ風に医者を認識はする。他方、その「知識」が何で

あるかの証拠を得ねばならぬ時には、彼は「どんなものどもの」知識でそれがあのかといふをこそ考察するだらう。各々の「知識」はそれが単に知識であるのみならずどんな知識であるべくも「何ものどものものであるか」といふ点でもって限定されてゐるのである。

ニ、「医術」の限定——「健康的なもの」と「病的なもの」との知識たるにおいてである。

ホ、「医術」の考察はそれがそれらの中にあるそこにおいてこそなすが必然である。すなはち、

「健康的なものども」と「病的なものども」においてこそ医者をどの道筋で医者であるかを考察するであらう、人にして彼が全うに考察せんと欲する者ならば。すなはち——

へ、その考察は、そのやうに或いは語られ或いは行はれることどもにおいてこそ、一方、語られる事柄は眞実が語られてゐるかを考察しながら、他方、行為されることどもは全うに行爲されてゐるかを考察しながら、考察されるのである。

ト、問題——そもそも「医術」なしにそれら言行のどちらかについて行けるか。否！ それはただ医者のみ

4. 帰結——もしも「思慮の健全」とはただ知識と無知識との知識なのだといふことであれば医者もまた何にせよ知識してゐる人々の中の誰一人をも、技術に属することどもを知つてゐる者として或いは知らないが知つてゐるふりをしてゐる或いはさう思つてゐる者として区別することは出来ないだらう。区別出来るのはただ「医者」と同じ技術を持つ者だけである。

第十九章 「思慮の健全」に精々のところ期待されること

1. ソクラテス、前章の帰結の示唆する「思慮の健全」の貧しさを先に想定したその利益と対照する。すなはち、先には「思慮の健全」は自分が何を知り何を知らぬかを知って一方は知ってゐると知り他方は知らぬと知って、他方そのやうに他人をも吟味することが可能なのであれば、無知からの過失を我々は免れ得て正しい指導のみが支配して「よく行ふこと」と「幸福であること」とがあり得るのだと考へたのだった、と。
2. 「思慮の健全」が知識の知識であることにもなほ残るかとも思はれるメリットのこと——
 イ、「思慮の健全」として見出されたもの、すなはち「知識と無知識との知識」は次の善きものを持つだらうか。曰く、人にしてその知識を持てば、どんな他のものを学ぶにもせよ、きっとよりたやすく学びかつより明白にすべてが彼に現れるといふそれ。彼はその学ぶものに加へて「知識」をもそこに見てとってゐるのだから。
 ロ、また他の人々をも彼自身も学ぶものについてきつとより見事に吟味するだらうか。他方、人にしてそのものを欠いて吟味するのであれば、きつと彼はより力弱く劣ってさうすることだらうか。
3. 1 2を纏めて、2でしかないのだといふのに我々は1のやうな先の想定を誇大にしてゐたといふのが真相か。

第二十章 正しき指導の善とは自明なことにはあらず。

1. ソクラテス、なほラディカルに反省し辛うじて前章に認めようとしてみた「思慮の健全」の持つかも知れないメリットまでも引っ込めて、「知識の知識」の可能性も「思慮の健全」が何を知り何を知らぬかを知るといふことをも例へ承認したとしても、「思慮の健全」から一体我々は何か裨益されるかといふその点は疑問だとする。

2. 右の理由づけ——無知に基づく行為が避けられ正しい指導のみが指導すればそれこそが善なのだ我々は先づはなしたのだが、それは自明なことではなかったのだ。

第二十一章 夢のやうな話し——「知識」の支配と端的な「幸福」との隔たり

1. ソクラテス、先づ逆夢か正夢かは知らぬが夢のやうな話しをするのだと断はる。

2. なるほど「思慮の健全」が支配すれば人類は知識に従って行為しかつ生きて行くであらう。しかしそのことは端的に「うまく行為すること」と「幸福であること」たり得るのか。

1. クリティアース、「知識に適ふ仕方」といふことを尊重しないならば「うまく行為すること」の目的を容易に見出すことはないだらうとする。

2. これに対するソクラテスの検討(一)——

イ、「知識に適ふ仕方」といふ場合のその知識のあり方を問ふてその知識とは革の裁断のそれでもなく金物細工のそれでもなく羊毛や木材の加工のそれでもないのだとの答へを得て、そこには「知識に従ふ」といふことがあるのに彼らの幸福が語られ得ないのだとすると「知識による幸福」といふ端的な線は崩れたことを言ふ。

ロ、すなはち、端的に「知識に適ふ仕方」といふのではなく、否、「或ることもについて知識に適ふ仕方生きる」のなら、その人こそが幸福なのだとかリティアースは限定してゐるのだとする。

3. 同右(二)——

イ、「或ることもについて」知識に適ふ仕方生きるとは「占ひ師」それも未来・現在・過去に渡りそのすべてについてすべからく知る者こそが最も知識に適って生きてゐることを確かめ合ふ。

ロ、しかしながら、そこで知られてゐるといふそのことも特に何であるとその知識が幸福に直結するのかを問ふ。

ハ、クリティアース答へる——それは将棋の指し方でも計算の仕方でも健康についてもなく、「善悪」についての知識でこそあるのだ、と。

4. ソクラテスの感想——「知識に適った仕方で生きることが「うまく行為すること」「幸福であること」を作るものではなく更にはそれは他のすべての知識のこともなく、否、それは一つあるもの、善きものと悪しきものについての知識のことだといふことを隠してクリティアースはソクラテスを引っ張り回してゐたのだ、と。

5. 次いでソクラテス、「善悪の知識」と「諸技術」との間で問答させる——

イ、「善悪の知識」が「諸技術」から取り去られると「諸技術」はそれとしての働きをしないか。する。

ロ、だがしかし、「善悪の知識」が欠けるならば「諸技術」が利益に適って行使されることの可能性は失はれる。

ハ、「善悪の知識」はそれとしてその内容において我々を裨益するものであり、「思慮の健全」は知識と無知識についての知識として無内容であるから、それらは相互に相違する。

6. クリティアースの抗弁——「思慮の健全」は知識の知識であるからには「善悪の知識」をも支配し、それ故、我々を裨益するのではないか。

7. ソクラテス、「諸技術」こそはその仕事（エルゴン）をなすのであり、然るに「思慮の健全」とは知識と無知識とについてだけの知識であれば「思慮の健全」は利益の専門家ではない。それ故、「思慮の健全」は有益ではない。

第二十三章 探求者としての無能を思ふもなほ「思慮の健全」の善たることへの自信を言ふ。

1. ソクラテス、前章末の結論に鑑みその「思慮の健全」を探求する無力と無能とを言ふ。

イ、「知識の知識」の存在 (169d, 172b-d)、『その「知識の知識」が他の知識の仕事までも知ること (166e-167c, 168a-b, 171d-172c, 173a-d) 』などためにした不合理な譲歩の反省
 ロ、にも拘らず「思慮の健全」の無益を見てしまった。

2. 二つの悲しみ、一つの自信——

イ、「思慮の健全」に恵まれたカルミデースにとってのその無益
 ロ、苦心してトラキア人から学んだ唱へごとの無効

ハ、「思慮の健全」の無益はこれを依然信じはしないのであり、それは探求者の下らなさの所為であって、「思慮の健全」の善とそれを本当に所有する場合の恵みを思ふことは不動である。

3. ソクラテス、カルミデースに対し「思慮の健全」を持つかどうか反省することを求め、それを持つほどに幸福だと考へるやう勧告するのだと言ふ。

第二十四章 カルミデースの強制執行へ

1. カルミデースの答へ——自分がそれをもつかどうかはさっぱり分からぬこと、唱へごとは断然必要であること。
2. クリティアース、唱へごを熱心に聴いて学ぼうとするカルミデースは現実に「思慮の健全」の証拠を出してゐるのだとする。
3. カルミデースとクリティアース、ソクラテスについて行く気持ちを言ひ、その要求を互ひの間で言ひ合ふ。

4. 最後の情景——ソクラテス、二人だけの審議に何を審議してゐるのかと問ふがカルミデースが審議は終はったと答へるのに、では後は強制執行なのかと冗談を言ふ。その冗談のままに強制執行だとカルミデースが答へ対策を思案するやうにと言ふのに、カルミデースの強制執行には誰一人反対は出来ないだらうと言ふ。